

トピックス

瑞江鶴の会が東部区民館祭りに参加

11月10日(日)、瑞江鶴の会は毎年恒例の東部区民館祭りに参加、有志が舞台上で太極拳を披露しました。あいにくの曇り空でしたが、お揃いのTシャツで気も揃い動きも揃って、太極拳のゆったりと



した心地よさを観客の皆さんに伝えることが出来たとの同会代表の小林恵子さんからの報告です。

写真は同会の蟹谷幸子さんと宇留野良子さんの提供です。小生は別項の調布での太極拳に参加しましたので、欠席しました。

「深大寺合同野外太極拳」に参加

11月10日(日)に都立神代植物公園自由広場で開催された調布太極拳同好会、本部道場中野教室、他による合同野外太極拳に久しぶりに参加しました。毎年上記の東部区民館祭りとか



ち合っってなかなか参加できなかつたのですが、今回東部区民館祭りは瑞江鶴の会会員の皆様に任せて、調布の皆さんとの交流の集いに参加したものです。紅葉がきれいな公園で太極拳を楽しんだあと、深大寺まで散策し、門前蕎麦の「雀のお宿」での懇親会がまた格別でした。【写真は服部隆師範提供】

東大島鶴の会が亀戸を散策

東大島鶴の会では11月8日(金)の例会の練習時間を短縮して、散策を楽しみました。『江戸の風情を訪ねて～押上から亀戸まで～』ということで「押上の普賢様」「柳島妙見」「萩寺」「亀戸天神」「普門院」などなど今に残る江戸の風情と今に伝わるお話の虚実を、秋晴れのもとで楽しんでいただきました。ガイドは江戸好きの私が勤めました。散策の締めくくりは亀戸駅前の中華料理屋さんでの昼宴会でした。

【上；萩寺（竜眼寺）での記念写真】



清新プロバンス会で勉強会を実施

清新くすのきプロバンス会早朝太極拳グループは11月16日(土)に17名が参加して、地元の清新町コミュニティ会館で懇親会をかねた勉強会を行いました。3回目の今回は「太極拳の太極とは何か」、という

テーマで『易経』、『太極拳経』、『陰陽五行説』などについて資料に基づいて勉強していただき、そのあと昼食を取りながら和気藹々の懇親会で盛り上がりました。

東京都支部指導者研修会に参加

1月23日(土)に開催された東京都支部の指導者研修会に参加しました。この研修会は教室指導者ならびにそれに準ずる師範を対象に開かれたもので、今回は定員一杯の200名が参加しました。講師には楊慧先生をお迎えして「楊名時太極拳の心と技を学ぶ」をテーマに豊島区立南長崎スポーツセンターで開催されたものです。私も支部研修委員会の一員としてお手伝いさせていただきました。また、瑞江鶴の会からは宇留野良子(研修委員)、

小林恵子、橋本弘子、藤城弘子、八武崎ユキエの各師範が参加しました。

講話も実技もたいへん実りの多い研修会でしたので、今後



の教室指導に大いに役立させていただこうと思っております。【写真左; 全員の表演(露澤徹師範撮影)、右; 楊慧先生の講話(茶木撮影)】、

閑人閑話

「六阿弥陀詣」^{もうで}の奇々怪々

先月号で歴史の虚実について書きましたが、今回はこれに宗教・信仰と商魂?や地元愛?が絡むとさらに奇々怪々なお話に変幻するというお話です。江戸時代に江戸庶民のあいだで流行った「六阿弥陀詣」という、行基が彫ったとされる阿弥陀如来像を祀る六つのお寺をめぐる、信仰を兼ねた春秋のお彼岸の行楽の行事が有りました。

『聖武天皇の時代、足立の国の長者足立庄司従二位藤原正成が熊野権現に願をかけて、娘清姫(のちの足立姫)を授かった。美しく成長した清姫を隣の国の領主豊島左衛門清光が見染めたため嫁に出したが、姑にいびられて里帰りする途中、思い余って入間川(現在の隅田川・足立区宮城2丁目辺りとか)に身を投げてしまう。さらには付き添っていた侍女5人(一説では12人)も後を追ってしまった。

長者は彼女らの霊を弔うべく熊野への巡礼の旅に出たところ、“熊野山中の光明木(昼夜を問わず光っているとされる霊木)を僧行基に6体の阿弥陀仏に彫らせて、それをねんごろに供養せよ”との夢のお告げがあり、その木を探し出して熊野から海に流したものが入間川にたどり着き、そこへ行基がやってきて一夜で6体の阿弥陀仏と残材で1体の観音像を彫ってくれた…』というのがその由来となっています。

これが一応足立区派?の今に伝わる由来ですが、北区派?となると登場人物の立場がそっくり入れ替った話になります。たとえば、1番寺は北区豊島2丁目の西福寺ですが、この由来書には、

『その昔、北条一族で豊島郡一帯を支配する豊島左衛門清光の一人娘清姫(のちの足立姫)が足立郡の豪族足立少輔と婚約を結んだ。清姫は5人の腰元を連れて嫁入りしたが家風に合わぬとして帰されたので、悲しみのあまり5人の腰元とともに入間川に身を投げてしまった。』というものです。そのあとの話は足立長者が豊島清光にそっくり入れ替わっているだけでまったく同じです。さてどちらが真実やら?

さらに若干時代考証をしますと、行基(668~749)は聖武天皇時代の名僧として知られています。東大寺の大仏建立の立役者ですし、行動派の僧として、とくに関西一円で、多くの寺の建立のみならず、道路、橋、溜池、船息(港)、布施屋(貧者宿)なども多く作った、いわば社会事業家としても有名です。

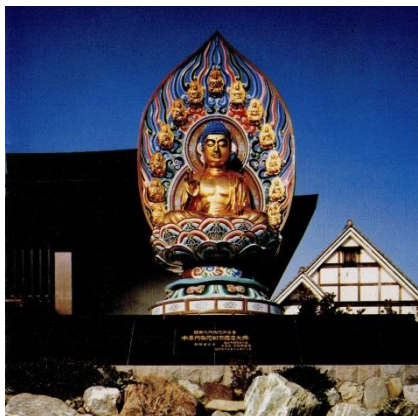
足立庄司従二位藤原正成と豊島左衛門清光も実在する人物ですが、時代はずっと下がって12世紀ごろの

人物です。たぶんこの二人のどちらかの娘に関する悲話が後世に伝えられてゆくなかで、仏像を彫った人物を行基に仕立てて、いわば、話に箔と尾鱗をつけて広めたものと思われます。

六阿弥陀のお寺とは；1番 西福寺（北区豊島2丁目） 2番 恵明寺（足立区江北2丁目） 3番 無量寺（北区西ヶ原1丁目） 4番 与楽寺（北区田端1丁目） 5番 常楽院（調布市西つつじが丘・下谷広小路から移転） 6番 常光寺（江東区亀戸4丁目）です。

これらの寺は現在でもこの六阿弥陀詣をウリにして、けっこう繁盛しています。昔のように一日で6箇所を巡るというのではなく、各お寺が(温度差はありますが)それぞれに工夫を凝らして自分のお寺に信者や散策客を集めています。

西福寺(左)と常光寺(右)は、本尊とは別に立派な露座の阿弥陀仏を建立しております。



ところで、実は同じ足立区にも古墳遺跡のあるほど古い「伊興」や「舎人」の地には、毛長川を挟む埼玉県の「新里」（現草加市）との間でまったく同じ長者

同士の婚姻と嫁の身投げ伝説が残されているのです。しかも身を投げたとされている毛長川こそ古代の入間川の川筋であったということですから、ひょっとするとこちらが本家の話かもしれませんね。

【東大島鶴の会の「亀戸散策」で用意した資料をもとに書き直しました。】

左顧右眄（78）【第15話 楊名時師家の名語録をひもとく】

第8話 鍛錬千日之行 勝負一瞬之行 (1993年9月 「太極」第82号)

『「鍛錬は千日の行、勝負は一瞬の行」 この千日は、約3年間。武道の最初の修練は三年間稽古を積むと、やっと何かとわかりかけてくる。「石の上にも三年」という言葉もあるように、三年は鍛錬の始まりの、一区切りの時間である。

さらには、十年というのが次の区切りである。鍛錬には、十年という長い歳月を必要とするのである。十年選手という言葉もある。また、中国では古来、人を育てるには十年かかる、と言われている。

「行」とは、この場合、鍛錬とか、修練とか、修行とか、積み重ねての稽古ということである。三年かかって、まあやっとわかってきた腕前だが、その勝負を決するのは、まばたく間、一瞬の間である、という意味である。この時間の妙を考えていただきたい。

健康についてもこの言葉があてはまる。日々の太極拳の積み重ね、繰り返し稽古して、三年もすると、ようやく体全体が整ってくるが、そのようやく出来上がった健康も、こわすときには、一時で、簡単に壊してしまうのである。壊さないような努力が絶えず必要となってくる。……

健康はすべての人間の、最大の幸福である。

でも、人間は健康なときに、案外、心配ごとをしたり、気に入らないことを怒ったり、悩んだりする。それで、自分の健康をこわしたりしてしまうことが大いにありうる。健康なときは、健康でいることがついであたりまえと思いがちになるのだが、いったん、ほんとうに病気になったりしてしまうとはじめて健康のたいせつさに気づく。

健康こそ、幸せであり、いきがいである。自分の幸せだけではなく、家族や、自分につながる多くの人々のためにもなる。「心・技・体」と言うが、私たちは、太極拳を通じて、日々、心の技、体を動かす技の両方を大事に鍛えることによって、心と体の健康を築き上げていくことができるのである。……』

「石の上にも三年」とも書かれているように、太極拳を自分一人で演ずることが出来るのにはやはり 3

年ぐらいはかかるものです。“飽きず、焦らず、のんびりと”仲間の皆さんと楽しみながら続けてゆくように心がけていただきたいと思います。また、楊名時師家の健康というものについてのゆるぎない信念があらわれている一文ということでご紹介しました。

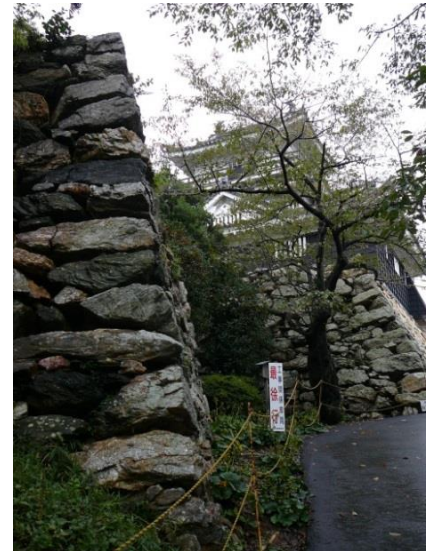
旅をうたい拳を詠む 浜松から掛川へ

所属する大江戸熱愛倶楽部秋の旅行、今年は家康の足跡を追って浜松から掛川を回る一泊2日の旅となりました。その時作った短歌を写真とともにご紹介いたします。

今もなお崖はおどろに深々と雨はしとどに供養碑濡らす
(犀ヶ崖古戦場)

石垣は草付き苔むし家康の苦難の時代を偲ぶ城跡
(浜松城) 右；浜松城の野面積みの石垣
安政の遺構を今に新居関生き人形が番所に並ぶ (新居関)

猪鼻の湖^{うみ}を茜に染めながら秋の夕日は速く落ちゆけり(猪鼻湖)
献上の象も通りし姫街道^{みつかび}三ヶ日蜜柑を見やりつつ行く
女改めの哀話を聴くは姫街道気賀の関所に桂花の薫る
(姫街道・気賀関)



井伊家ゆかり龍潭寺^{りょうたんじ}なる禅寺に
祇園精舎の説話聴かざる (龍潭寺)

蛇行する天竜川を見下ろして二股城址に秋の風聴く
(二股城址) 右；二股城址から見下ろす天竜川

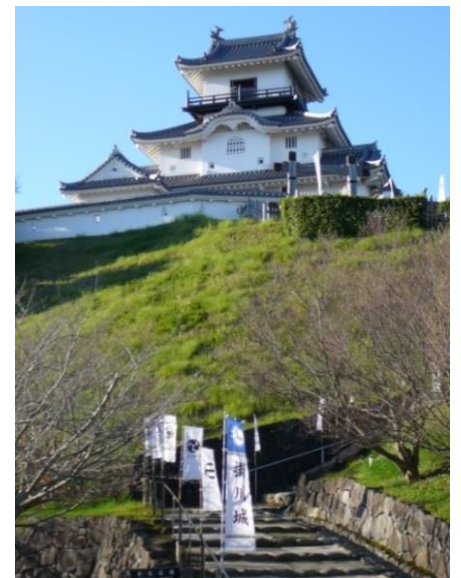


自刃せる信康祀る清滝寺金木犀が風に揺れゐる
(清滝寺)



石組みを登りつめれば天守台遠江の空雲一つなし
(横須賀城址)

左；横須賀城址



東海道ど真ん中なる袋井宿ふわふわ卵に往時を偲ぶ
(袋井宿道の駅)

安政の地震に潰えし掛川城平成の世に雄姿再び
(掛川城)

右；掛川城天守閣